

あわよくば

2 MARK 勝負

本誌の生き字引、ヤマケイへの感謝

今回は少々内輪の話になるが、お付き合いいただきたい。「ジジ放談」でもお伝えしたように、この号をもって主筆の山本圭一（以下、いつも通りの呼び名でヤマケイ）が本誌の製作から引退することになった。マクルは一昨年、創刊30周年を迎え、現在32年目となるが、ヤマケイは創刊当時からメンバーで、副編集長、編集長を経て現在の主筆という立場で、本誌作りに携わってきた。

主に特集やビッグレースの展望を担当し、特集をメインコンテンツに据えている本誌の根幹を担ってきた。ゆえにマクルの看板記事のほとんどはヤマケイが書いてきたものなのだ。

読者時代に強く印象に残っているのは、宮島新鋭王座決定戦の展望（98年2月号）の見出しに「市川哲也の独壇場」と書いてあり、その通りの結果になったこと。当時ビギナーだった私は、ズバピタで当てたヤマケイが書いたその記事を見て「すげー」と心から思った。その後、私も編集者になり、読者に感心させる記事を書きたいと思うようになった。きつかけがこれだった。

ヤマケイのすごいところは、何といっても知識量。それはボートやギャンブルに関することだけでなく、政治、経済、スポーツ、ゴシップと、とにかく守備範囲が広い。しかも本誌に関

してはメモ不要で、「○年の△月号でこの企画をした」と正確に記憶している。特に昔のことになればなるほど、レース内容を含めてきつちり覚えているところが驚く。それもあって回顧記事の「タイムマシン」を掲載していた。これはまさしく30年以上ボートを見て、愛してきた「生き字引」であるヤマケイにしかできない企画だった。

大体いつも寝ているし、タイピングも速くないのに、なぜかボリュームある原稿がきつちり仕上がってくる。なので「ヤマケイさんの家には寝ている間に仕事をしてくれる小人がいる」と噂になったものだが、真偽のほどは定かではない。

人柄もよく、ベテランの記者と話をすると、「ヤマケイさん元気？」とあいさつ代わりに聞かれることもしばしば。引退することを伝えると「そうかー」と残念がる人ばかりだった。

これだけ長く誌面を作り続けているにもかかわらず、バラエティに富んだ企画内容や斬新なアイデアで読者だけでなく我々もいつも驚かせられてきた。そんなヤマケイイズムを継承しつつ、より良いものへと昇華させ、今後の本誌づくりに生かしていく所存です。長い間、ありがとうございました。お疲れさまでした。

（ウエスギ）